

ウェブ 田舎暮らしを応援します!

田舎暮らし応援県わかやま

検索



棕櫚箒ができるまで

1



強い繊維でできている棕櫚の皮。それを巻いて、箒の毛の部分を構成する「玉」を作る。この時、糸と銅線で強く縛るので、すごく力がいる。



一枚の皮から数本しか取れない太い繊維「鬼毛」のみで作られた鬼毛箒（左）と皮全体を使って作られた皮箒（右）。棕櫚箒は大きくこの二種類に分けられる。丁寧に扱えば、20年は使えるという。

2



金槌でゴンゴンゴンッと、玉を竹の串にさしていく。5・7・9・11玉とあり、11玉が一番の高級品。

3



毛先をさばいで、干したらできあがり。他にも竹に穴を開けたり、皮に付いた樹脂を取り除いたり、細かい作業がたくさんある。

シュロの「ほうき・たわし」から 家庭用品の最大産地へ 全国シェア80%超

紀美野町に隣接する海南市は、キッチン、バス、トイレットなど使う家庭用品の国内シェア80%超の最大産地。ルーツはあの弘法大師が中国から持ち帰ったとされるシユロの製品。戦後登場した化学繊維などの新素材を積極的に取り入れ、全国に張り巡らしたたわしなどのシュロ製品の販路を活用して、しっかり生き残った。現在約200社が集積している。

消費者が困っていることを商品に」を合い言葉にユニークな新商品の開発を続ける元気な企業が多い。たとえば、置くだけでびたっと便座に張り付く便座シート、水だけで油汚れが落ちるスポンジなど、ここには「あつたらいいな」の商品がぎっしりだ。角谷勝司・海南商工会議所会頭は「オンライン販売で商品を開発する企業が生き残る」と意気きわめて軒昂だ。



棕櫚箒を作る西尾さん。
京都の老舗商店では、柄の部分に和歌山県日高町の特産品である黒竹を使用した箒が好まれるという。

ゴンゴンゴンッ。強く響いてくる音に導かれるように、工房の中へ足を踏み入れる。積み上げられた棕櫚の皮に埋れるようにして箒を作り一人の職人。「こんなちは」と、笑顔で迎えてくれた。けれど、手を休めることはない。桑添勇雄さん（七九）と西尾香織さん（三〇）。広島県出身の西尾さんは昨年九月、山間の町・紀美野町で棕櫚箒を作る和歌山県の名匠のひとり・桑添さんに弟子入りしたばかりだ。

気がついたら
チャイムを押
していた

「この世の楽園の
ようなところだと
思つたんです」
和歌山に移り住
んだ理由を尋ねた
ら、こんな言葉が
返ってきた。四年
前の春、旅行で訪
れた和歌山は海沿
いに桜が咲き、「まさ
に『樂園』だった」という。思わず口にした「引っ
越してこようかな」

という言葉が魔法の呪文のように
働いて、和歌山での生活がとんと
ん拍子に決まった。

移住当初は、広島に住んでいた頃と同じくグラフィックデザイナーとして働いていた西尾さん。海が好きで、万葉集にも歌われた「片男波（和歌山市）」によくでかけたという。和歌山のことをもっと知りたいと、郷土資料を眺めていた時、棕櫚箒に出会った。「写真を見て、意表を突かれたんですね。古くから変わらない自然なほど、私が和歌山に感じていた魅力は、『素朴さ』、でも棕櫚箒の美しさは『洗練』そのものだったから」。

写真の箒の作者が桑添さんだった

ねると、「すごく高い美意識で作られてること。單なる日用品ではなく、機能美というのかな。完成されたデザインからそれが伝わってくるんですよ」と、恋をしているよう目の師匠の箒を見つめる。注文や問い合わせの電話で作業が中断される師匠の負担を減らすため、デザイナー時代の経験を生かして、桑添勇雄商店のホームページ（<http://www.shurohounki.com>）も作った。

これからの五十年を
続けていくために

素朴な“樂園”で見つけた“洗練”

棕櫚箒職人見習い 西尾香織さん

産業で栄えた紀美野町で、半世紀も棕櫚箒を作り続ける、この地の最後の職人のひとりだ。今年度の「名匠」として表彰された匠だが、意外にも西尾さんが初めての弟子だと

いう。「こんなべっぴんさんがねえ、ホコリのたつ仕事をようするかあって聞いたら、"する"って

言うからね。力仕事やけど、習得も早いんですよ」。うれしそうに西尾さんの仕事ぶりを見つめる。

西尾さんのこの日の仕事は、京都の老舗商店に卸す「手箒」作り。平成19年度「和歌山県名匠」の桑添勇雄さん。

普段はやさしい笑顔が浮かぶが、西尾さん曰く「やはり仕事の面では厳しいですよ」。



平成19年度「和歌山県名匠」の桑添勇雄さん。
普段はやさしい笑顔が浮かぶが、西尾さん曰く
「やはり仕事の面では厳しいですよ」。